

タイトル	レジスター管見：談話分析の視点から
著者	岡野，哲
引用	北海学園大学人文論集，10：17-38
発行日	1998-03-31

# レジスター管見

— 談話分析の視点から —

岡野 哲

## Summary

### On REGISTER — A Discourse-Analytic Outlook

It is attempted in this essay to scrutinize the definitions of the concept of REGISTER and to attempt any possible remedy for ambiguities in the use of the term. REGISTER began to appear in the literature in the early sixties, but its definition have not reached sufficient clarity, distinctness and usefulness as yet. It is noted that nowadays the term is found being used as a slippery but convenient signpost by American sociolinguists with its ambiguity still undissolved.

The ambiguity is rooted in its earliest conceptualization.

This is made clear by applying the Hjelmslevian distinction of INVARIANT/VARIANT/VARIETY/VARIATION to the actual use of the term in the literature.

There is no question that REGISTER is related to an individual speaker's language — IDIOLECT which is a continuum of infinite diversification. But no humans are capable of being alive without their inborn knowledge of NORMALIZING their own world. Thus they naturally get to know the norms, types, or regularities in their own idiolects and other surrounding idiolects they are in constant contact with.

It is often the case that categorization is not amenable to some idiolectal differences, but where it is, it is made possible through the medium of condition which stands between the nebulous continua of

idiolects and their categorizations. This sort of condition, however, cannot be summarized by a simple term such as REGISTER.

The concept of REGISTER can only be useful as a general designation of an area of study relating to how to discover norms or regularities and categorize them with the use of other more well-defined concepts. Otherwise it will turn out to be nothing but a nuisance to meticulous analysts.

**Key Words:** *idiolect, variety, context, genre, style.*

## 序 言

〈レジスター〉<sup>(1)</sup> という術語の定義として最も普通に引用されるのは、Halliday, M.A.K., et al. (1964) の次の様な方言 (dialect) との区別であろう：

……what varieties of its [= a language community's] language are there? Under the second question come these subdivisions: varieties according to users (that is, varieties in the sense that each speaker uses one variety and uses it all the time) and varieties according to use (that is, in the sense that each speaker has a range of varieties and chooses between them at different times). The variety according to user is a DIALECT; the variety according to use is a REGISTER.<sup>(2)</sup>

そして、これを補足するように、彼らは

Language varies as its function varies; it differs in different situations. The name given to a variety of a language distinguished according to use is 'register'.<sup>(3)</sup>

とも述べている。

文献<sup>(4)</sup>によれば、これに先だって、Strevens, P.D. (1963) や Catford, J.C. (1961) の同じ趣旨の発言があったことが明かになっている。このような状況は、イギリス言語学界の指導者で、ロンドン大学最初の一般言語学教授であった J.R. Firth (1890-1960) の死の前後から、M.A.K. Halliday 等、Neo-Firthians と呼ばれる人たち<sup>(5)</sup> が、B. Malinowski (1884-1942) の〈context of situation〉の概念と格闘していた中から、生まれて来ざるを得なかった術語としての〈レジスター〉を物語ると言えよう。

イギリス言語学界の状況がどうであったにせよ、彼らの言う〈レジスター〉が上掲の短い定義の中で厳密かつ明晰に説明されているとは言い難い。この説明の中には明かな曖昧さがあり、それが何に起因するかは後に触れるが、兎にも角にも、一般の〈レジスター〉研究、ないし〈レジスター〉概念を用いた研究がここを出発点としているために、種々の混乱が起こっていることを指摘しておかねばならない。特に、〈レジスター〉の概念がイギリス言語学の境界を超えて、社会言語学など関連の研究領域に流布されるに至っている状況を念頭に置くならば、この術語についての考察を深めることには、相応の意義があると言わねばならない。

## 1. 〈レジスター〉概念の定義と運用における諸問題

アメリカの社会言語学者達も〈レジスター〉の用語を用いて、言語運用の諸相の丹念な研究を行っている。しかし、彼らの中に〈レジスター〉の概念規定が完全に行われていないことを熟知ないし意識している者がある。

例えば、Biber (1994) は、〈レジスター〉を巡って、上述のような定義の線に沿った“一定範囲の社会的状況を含むものとしての言語使用の領域 (the register range of a language comprises the range of social situations recognized and controlled by its speakers — situations for which appropriate patterns are available)” (Ure (1982))<sup>(6)</sup> としての捉え方を

まず掲げながら、この種の一般論の域を出ずに、場面による変異形態として漠然と捉える事が多いと指摘している。さらに、彼は

- 1) 特定の職業上の用語や言語運用の習慣に限定して〈レジスター〉という場合、
- 2) この用語の必要性に厳しい否定的批判を加え、あらゆる場合に〈スタイル〉(style) という用語で統一する場合、
- 3) 〈レジスター〉を言語運用の場(occasions)によって生じる変化をすべて現す便宜的な用語とする場合、
- 4) 〈レジスター〉の代わりに〈ジャンル〉または〈テキスト・タイプ〉(text-type) という用語を用いる場合、
- 5) より厳密に、記号論的に〈ジャンル〉は〈レジスター〉に対して“内容の面”(content-plane)を示し、〈レジスター〉は〈ジャンル〉の“表現形式面”(expression-plane)であるとし、さらに、〈レジスター〉は言語の“内容の面”に位置するとする場合、
- 6) 〈レジスター〉を排して〈ジャンル〉を用い、コミュニケーション行為の目的によってこれを限定しようとする場合、
- 7) 〈レジスター〉を方言、職業的方言、隠語などのレベルに置いて、会話、インタビュー、物語等、および、手紙、文学、広告等の“談話のタイプ”(discourse-types)と区別する〈language varieties〉として位置づける場合、
- 8) 特定の限定された領域(ある種の病理学的理由によるものなど)について、〈sub-language〉という用語を用いる場合、

など、多様な用語が、関連する同じ言語運用の現象を指示するために、多かれ少なかれ曖昧さを伴って用いられていることを、整理して示している。〈レジスター〉を巡る定義と用語法については、まず以上の事実を指摘しておく。<sup>(7)</sup>

これで多様な〈レジスター〉概念の解釈を尽くしたとは言えないのであるが、分析の実践における混乱の一例を挙げて考察してみる。Malcah Yaeger-Dror (1996) は、Yaeger-Dror (1991) において〈レジスター〉を“言

語使用の場面 (Situations of linguistic usages)” と見なした事を認めながら、この論文では、会食時のやり取り (“casual” interaction), 治療のため (therapeutic) の対話, 大学での個別指導 (tutorials), 講義 (lectures), 文学作品, 回想録 (memories), 独白体 (monologue) の読み物, 政治的討論 (political debates) などを〈レジスター〉という枠組みでとりまとめている<sup>(8)</sup> (図1参照)。

<u>Code</u>	<u>Content</u>	<u>Register</u>
	<b>Interactional</b>	
° CH-4	Dinner Party	casual
° TG	Telephone	casual
° GTS-5	Therapy session	casual
° GTS-5	Therapist	therapeutic
	<b>Informational</b>	
° SCRL	DARPA tutorial	lectures
	<b>Read prose</b>	
• Tyler	<u>Breathing Lessons</u>	literary fiction
• Keillor (L)	<u>Lake Wobegon Days</u>	literary monologue
• Keillor (M)	<u>Lake Wobegon Days</u>	memories
• Cleary	<u>Ramona the Pest</u>	kids' prose
	<b>Political debates</b>	
*Babbit/Mecham	MacNeill-Lehrer recording	debate
*Rio Salado	NPR recording	debate

(図1)

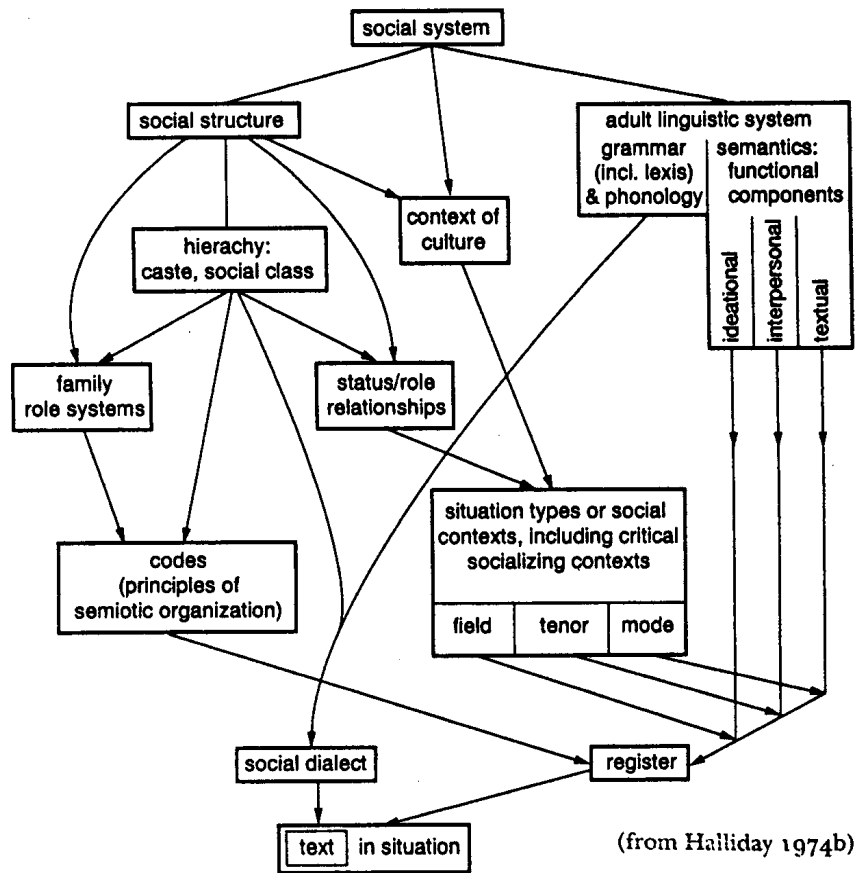
また、同様に、Heath & Langman (1994) においては、スポーツ・コーチの言葉使いが〈レジスター〉の名のもとに分析される。彼女らの行った様々な言語的特徴の分析には興味深いものがある。しかし、その〈レジスター〉概念は必ずしも明確でない。彼女らは多様な言語的特徴の“束”ないし集合が、ある種の社会的状況の型を中心に合体し (“……the bundles of linguistic features that coalesce around certain types of situations or

uses.”<sup>(9)</sup>), 教育的指示の〈レジスター〉(instructional register)とカスポーツの〈レジスター〉(sports register)となると考える。一方, 特定のな型の〈レジスター〉(“a particular type of register”)は, このレパートリーの中の個々の異形(variant)とみなされる。このようにして彼女らは, 例えば, 教育的指示の〈レジスター〉は幾つもの下位形態(例えば, 男性/女性コーチなど,あるいは, ベースボール/フットボール/バスケットボールなどの様な)を融合せしめる, いわば, 上位範疇であると見なす。しかし, 彼女らには, どちらの抽象のレベルも, 等しく〈レジスター〉である。<sup>(10)</sup>

選択体系的機能主義(systemic functionalism)と関連ある立場をとっているとされる Eija Ventola (1995)においては, テクストが〈ジャンル〉のレベル(“plane”)での構造体であり, それによってテクストが秩序をもって文脈との整合性を与えられると言われる。そして, 文脈との整合性が〈レジスター〉の組織である(“generic organization of the texts gives order to contextual tuning or register organization of texts”)<sup>(11)</sup>。この場合, 〈レジスター〉は〈ジャンル〉に対して別の一つのレベル(plane)をなし, それぞれ要素の選択的体系(“system choices captured by networks”)である所の FIELD, MODE, TENOR の結合によって構成されつつ, 言語レベル(language plane)の特徴となって実現するという。この場合, 〈レジスター〉は言語表現の特徴とは直接的には結び付かない。逆に, FIELD, MODE, TENOR の特性選択を決定するのは〈ジャンル〉である。選択体系言語学の内部にも立場の一致が見られないところがあると言われるが,<sup>(12)</sup> 〈レジスター〉もその一分野であるという。いずれにせよ, この立場からみると, 明かに, 〈レジスター〉が言語的表現の特徴を直接的に記述説明するものではない。(図2参照)

## 2. 多様な〈レジスター〉論はどこからくるか?

Ventola (1995)に見るこのような〈レジスター〉観は, 1960年代には想定されていなかったであろう精緻な理論の展開があつてはじめて生まれ得



(図 2)

と思われる。理論の精緻な展開に伴って生じる種々の見解の相違は、当然の事として認めなければなるまい。本稿では、選択体系的機能主義そのもの、あるいは、該当する諸家の見解に対する検討に入ることはさて置くことにして、むしろ、上述したアメリカ社会言語学のような実証的研究に見いだされる〈レジスター〉概念の受け止め方を主として、談話分析的な立場から、以下の考察をすすめることにする。

〈レジスター〉という観念の背景には、統一的な実体をもった言語の存在に対する拒否の姿勢が伺える。例えば、P.D. Strevens は言う：

In countries where English is the mother tongue it is usual for both the general public and those who teach English to talk about the language as if it were a single, identifiable, consistent entity.<sup>(13)</sup>



これは、全く正当な認識である。しかし、同時に、彼や J.C. Catford 達が、ある一つの言語の存在を否定し去った訳ではなく、その言語の統一的一体性を否定したにとどまる事に注意しなければならない。そこから、既に引用した Halliday, M.A.K, et al. (1964) や、つぎの文章にみる“言語が変わる (varies)”とか、“言語の違った種類 (varieties)”のような言い回しが発生する：

Another axis differentiates the varieties of English which we associate with different *uses* [italics original]. It is the aim or purpose of the language, on any occasion, which is examined under this heading, independently of the personal characteristics of the individual performer. The name which we give to any variety along this axis is *register* [italics original].<sup>(14)</sup>

この種の緩やかな理論的枠付けが、社会言語学的分析にも、明かな影響を及ぼしている事は、Ferguson (1983) にみる通りである：

……register variation, in which language structure varies in accordance with the occasions of use, is all pervasive in human language.<sup>(15)</sup>

しかし、そもそも“変わる (vary)”とか、“変異形 (variant)”とか“変種 (variety)”などの事柄については、多様性のみを単純に問題とすれば済むというものではない。このように表現される“変化”は、多様な存在が統一的一体性をもった実体を前提として存在する、と見なすことで、はじめて可能になる考え方なのではないだろうか。これは、認識の方法の一般的法則の一つである。この前提を認めるならば、多様性以前に有るものが、何によって多様化するのか、多様化の条件は何かを説明するという記述を行うことができる。

このように、〈レジスター〉の位置づけについて、“varieties”とする Strevens (1964) などと、“variation”と考える Ferguson (1983) などがある。しかし、これらの諸家の構想の中で“variety”と“variation”が同じであると考えられていたのか、別個のものと考えられていたのかは必ずしも明かではない。その点を、「言理学」(glossematics)を唱えた Hjelmslev (1961)<sup>(16)</sup>の尺度に照らして検討してみることにする。

まず、彼には「不変体 (invariants)」と「変異体 (variants)」の区別がある。そして、「変異体」については「変体 (variations)」と「異体 (varieties)」が区別される。これらの区別は非常に抽象的に述べられていて難解を極めるが、例えば、表現の面で「音素 (phoneme)」は不変体であり、例えば、英語では /pet/ と /pæt/ が、〈pet〉と〈pat〉において、示差的対立をなすという意味で、単に /pet/ における /e/ が音声的に多様に変化するのとは別個の出来事であるとされる。これは、次のように説明される：

These specimens we shall call *variants*, and the entities of which they are specimens, *invariants*. [italics original]<sup>(17)</sup>

また、何等かの条件によって拘束的に決定される変異体は「異体」とされ、そうでない変異体は「変体」という。これは、次のように説明される：

The “free” variants we shall here call *variations*, and the “bound” variants, *varieties*. *Variations* are defined as combined variants, since they are not presupposed by, and do not presuppose, any definite entities as coexisting in the chain; variations contract combination. *Varieties* are defined as solidary variants, since a given variety always presupposes and is presupposed by a given variety of another invariant (or of another invariant-specimen) in the chain. [italics original]<sup>(18)</sup>

Hjelmslev (1961) の用語は独特なものであり、これに従う必要はないとしても、彼の枠組みを尺度としてあてはめてみるならば、Strevens (1964) における上掲の〈English〉は「不変体」であり、〈レジスター〉は「変異体」であろう。引用した文脈でみる限りでは明かではないが、おそらくは「変異体」の下位範疇である「異体」として考えられるであろう。これで、枠組みの理論的整合性は保たれるが、談話分析の観点からは現実的であるかどうか疑問が残る。

一方、Ferguson (1983) などの場合には、「不変体」は特に念頭になく、存在する多様な「変異体」の中に「異体」を見つけ出すという課題に取り組んでいるものと理解できるかもしれない。しかし「不変体」を無視して「変異体」を云々するというのは、現実的であるとしても、理論的には弱点になるであろう。「異体」と「変体」を区別しようとする取り組み方が、談話分析の視点からみて、説得性があると思われる。

### 3. 〈レジスター〉論を何処に基礎づけるか？

前節においては、〈変わる〉ということをどの様に考えるかに焦点を合わせて考察を加えた。Strevens (1964) 的な視点における〈レジスター〉は、Hjelmslev (1961) の謂う「変異体」が問題であった。これには、当然ながら、「異体 (variety)」と「変体 (variation)」が含まれる。また、Ferguson (1983) などの社会言語学的な視点からみた〈レジスター〉も、「変異体」がすべてであった。Hjelmslev 流に言えば、これは「不変体」にとっての〈標本〉 (specimen) であり、標本は特殊的 (particular) なものである故に「実現された (realized)」ものである。この点について Hjelmslev (1961) は次のように言う：

……an operation with a given result we shall call *particular*, and its resultants *particulars*, if it is ascertained that the operation can be performed on a certain object but not on any other object. On this

basis we call a class *realized* if it can be taken as the object of a *particular analysis*, …… [italics original.]<sup>(19)</sup>

この考え方の従うならば、〈レジスター〉は、あくまでも特殊な対象として分析、操作されるべき個人言語 (idiolect) から抽象され、実現する存在であると考えられる。以下においては、理論上の枠組みを評価する尺度としての Hjelmslev (1961) をこのように受け止めた上で、個人言語と〈レジスター〉の問題の捉え方を考察してみようと思う。

個人言語は間違いなくその存在が、存在しない、あるいは存在しなかった、とは言えないという最も素朴な意味で承認される。なぜなら、個人言語を運用する、あるいは運用したヒトの存在を否定することができないからである。そして、個々のヒトが限りなく多様であるように、個人言語も無限に多様である。しかし、明かに、また、この多様性は差異を含意し、その差異には大小の違いがあることも認めなければならない。ヒトであり、ヒトの行為・振舞いとしての言語である限り、全くもって似ても似つかぬということはある得ないが、他方において、同じ一個人の言葉においても、完全な同一性を実質的に保証することができるわけではない。極めて大きい差異を一方の極限に置き、極めて小さい差異を他方の極限とする無限の数の点の連続体 (continuum) があるのみである。

その意味では、Hjelmslev (1961) の「不変体」は虚構である。<sup>(20)</sup>

しかし、無限に多様なものとしての個人言語を、そのあるがままに把握するという事はある得ない。ヒトは世界を無秩序なカオスとして生きていくのではなく、経験を整理し、〈正常な〉状態を想定するという無意識の傾向を有する。談話分析の立場から、Brown & Yule (1983) は、これを次のように言う：

……On this basis of experience then, we recognise types of communicative events which take place against the background of a mass of

below-consciousness expectations also based on the past experience which we might summarize,……, as ‘the ASSUMED NORMALITY of the world.’<sup>(21)</sup>

さらに彼らは、哲学者 K. Popper からの次の引用によって、先験的な知識として、規則性を期待する性向がヒトにはあることを、談話分析の基礎に置く：

‘we are born with expectations: with “knowledge” which, although not *valid a priori*, is *psychologically or genetically a priori*, i.e. prior to all observational experience. One of the most important of these expectations is the expectation of finding a regularity. It is connected with an inborn propensity to look out for regularities or with a *need to find* regularities’ [italics original].<sup>(22)</sup>

このようにして、Hjelmslev (1961) のような理論的立場とは別に — あるいは、それと同様に — 個人言語の多様性を比較的安定的な範疇、および、その変異体の下位範疇に捉え直すことは、不完全な非学問的な立場からできても、不可能ではないのである。

かくて、あまり大きくない集団において、そこに属する人びとの個人言語に認められる一定の類似性 — 差異性ではなくて — を基礎に方言のような「不変体」(invariant)を認めることができる。しかし、例えば、スコットランドとイングランド南部、ニューヨーク市とジョージア州のような地域に住む人びと全体を考えたとき、そこに見いだされる個人言語の総体が、イングランド南部方言とかジョージア方言として、実体性をおびて存在すると考えるのは、方言地理学とか社会言語学などの理論的な構築物としての「不変体」である。まして、一つの「不変体」の英語があると認めるのは、政治的、歴史的およびその他の非言語的条件を基礎にした虚構である。

従って、〈レジスター〉が、英語という「不変体」(invariant)の「変体」

(variation)であるかのように思い描くことは、談話分析の立場からは適当ではない。むしろ、個人言語との関連で考えるべきである。

#### 4. <レジスター> 論はどの様に現れるか？

以上の考察からみて、本稿の冒頭で言及した“language varies as its function varies” (Halliday, et al. (1964)) や “language structure varies in accordance with the occasions of use” (Ferguson (1983)) における「言語が変化する」という意味は、個人言語には無限の「変異体」(variants)が存在する可能性があるという意味に受け取らなければならない。一方、これらの「変異体」の現れは、上掲の諸家達の言うところ、「機能」(function)あるいは「運用の場」(occasions of use)等が条件となる「異体」(varieties)としてである。「につれて (as) / に従って (in accordance with)」として表現されている関係が、ここに認められる。

しかし、<レジスター>に関連しているとされるこの「関係」が如何なるものと解釈されるべきであろうか。単なる「変異体」ではなく、これを「変体」と認めさせる決定要素はどのような性格を有するであろうか。

これが因果関係であるならば、条件となる要素は「原因」であり、結果としての「変異体」に先行し、これに伴う内的な必然性・法則性によってこれを「異体」たらしめる筈である。また、原理・体系・規範などが決定要素である場合も考えられる。これは「原因」と言うよりは、「根拠」とでもいうべきものであろう。いずれにしても、この種の条件が先行し、支配するのに対して、「異体」は結果として続き、従属するものと考えられるであろう。

しかしながら、言語について自然現象におけるような因果関係を想定することはできないし、また、その必要もない。<レジスター>が個人言語の問題であるとする場合、既に、ヒトとヒトが交わる社会現象としての考察を行っているのである。J. Ellis (1966) の挙げている英語の例は、説明が不足ながら、この事情を分かりやすく物語っている：

For example the participants in 'How do you do?' may be characterized (immediate features) as newly met, those in 'How are we feeling today, Mrs. Smith?' (wider features, yielding an immediate relationship) as doctor (or nurse) and patient.<sup>(23)</sup>

ヒトとヒトが会話を始めるという言語的場面の要件があって、そのヒトたちがどのような人間関係にあるかという社会的条件に支配されて、「変異体」に違いが認められる。イ) 初対面のヒトとヒトという対人関係と、ロ) 主治医(看護婦)と患者という対人関係が、2種類の異なる条件となって、ここに見る「変異体」を「異体」たらしめているのである。

「変異体」は実現した特殊な標本(specimen)である。これに対して、「異体」は、単なる「標本」なのではない。標本は無限に多様な現象としての「変異体」であって差し支えないが、「異体」は何等かの方法によって範疇化されなければならない。

また、J. Ellis (1966) にみるイ) とロ) の二つの条件も、無限に多様であり得る人間社会の出来事としてあるがままに受け止めるのではなく、「初対面」とか「主治医=患者」のように一般化し、範疇化する必要がある。これも、Brown & Yule (1983) が言うように、直接的経験から正常なものに整理し、規則性をそこに見いだそうとするヒトの生得的性向からして、極めて自然なことである。かくて、ヒトは無限の連続体を有限個の範疇に取り込んで整理し、ヒトを取り囲む自然と社会に対応するのである。言語と言語によるコミュニケーションにおいても同じである。

J. Ellis (1966) によれば、個人言語話者はそれぞれに個人言語の〈レジスター〉の視点からの範疇化を行っており、それが、言わば、〈レジスター〉のレパートリーの総体をなす。即ち、彼は言う：

By register-range is meant the total repertory of registers of the performer, his idiolect classified from a register point of view ……<sup>(24)</sup>

この文脈における〈レジスター〉は両義的である。即ち、イ) 個人言語話者の知識——「不変体」——としての〈レジスター〉と、ロ) 観点としての〈レジスター〉である。〈レジスター〉の観点とは、範疇化のことに他ならぬであろう。

一方、既に引用したように、Strevens (1964)<sup>(25)</sup>では「軸」(axis)という、個人言語における個人的特徴——「変体」——を捨象し、言語行為の目的に焦点を絞った視点を云々している。つまり、無限の多様性と変化の連続を何処で断ち切るかという方法上の問題は、〈レジスター〉を論じるに当り、避けて通る訳に行かぬのである。

以上の考察から、範疇化の枠組みを整理するに当り、次のような受けとめ方も参考にしたい：

……the categorization of tokens into types has just been described in terms of the process of pattern-recognition; …… (J. Lyons (1977))<sup>(26)</sup>

Exponence is the scale which relates the categories of the theory, which are categories of the highest degree of abstraction to the data. (M. Halliday (1961))<sup>(27)</sup>

いずれにしても、範疇化とは関係づけることであり、すでに考察したように、〈レジスター〉については、関係づけに関与する条件、要因の媒介が加わる。当然、問題の焦点の中にはこれをも視野に入れて、現象における抽象のレベルを要約すれば、以下のようなになる：

- (1) 最も非抽象的なもの：—— variant / specimen (Hjelmslev); token (Lyons); data (Halliday).
- (2) 抽象化の条件：——
  - a. 内的な条件：ヒトに生得的な性向 (Brown & Yule / Popper); pattern-recognition (Lyons).



b. 外的な条件：「～に従って」と表現される要素。

(3) 抽象化の結果：— type / pattern (Lyons).

(4) 普遍的な概念：— the categories of the theory (Halliday).

この枠組みの中に〈レジスター〉を位置づけようと試みるならば、それは、明かに(1)ではあり得ない。

逆に、(4)のように最も抽象度の高い理論上の概念であるとしたら、音韻論、統語論のような上位概念、あるいは、それより少し下位の音素配列論とか語順のような概念と同等のレベルにあると考えられるかもしれない。しかし、談話分析の観点からすれば、「個人言語」の— 個々のヒトの発話ではなくて— “概念”が、(4)のレベルに置かれるという考え方が可能である。〈レジスター〉をここに位置づけることも不可能ではない。その場合、〈レジスター〉そのものの内容を直接に問うことは難しくなる。

また、(2) a. が関与することは明かであるが、これは、ヒトに普遍的な心理過程ないし認識のあり方であるから、〈レジスター〉のみがこれを条件として必要としている訳ではない。従って、考慮の外に置くことになる。

以上の消去法の結果としては、〈レジスター〉は抽象化の外的条件と考えるべきか、抽象化の結果と考えるべきかの、二つの選択肢が残る。これを上掲の Ellis (1966) が用いた発話の例に適用してみる。

a. How do you do?

b. How are we feeling this morning?

であるが、これを〈レジスター〉の問題として考えるとき、まず、個人言語として同一人物の発話であるという前提を置かねばなるまい。この人物が b. の発話を行う機会があると言うことは、普通は医師または看護婦(教師や親の場合もある)であるという身分上の制約が考えられる。「親身の we (paternal 'we')」が最も非抽象的な「レベル(1)」で現れるのは、話し手の身分・立場「に従って」起こる「結果」である。一方、a. の発話が現れるのは、この医師、看護婦などの身分をもった人物が、初対面のヒトに挨

揶をしていることを条件としておこる「結果」である。

この場合、結果として起こった最も非抽象的な発話 [レベル(1)] そのものでは b. 「親身の 'we' を使うかどうか、また、a. 「答えを要求しない疑問文」を使うかどうか、としてしか、違いを論じることができない。しかし、これは、医師・看護婦と患者の関係とか初対面のヒト同士という条件が媒体となっていることによって特徴づけることとは、抽象のレベルが異なる話である。

一方、抽象の「レベル(1)」における異同を、直ちに「レベル(3)」によって特徴づけることは不可能であろう。たとえば、「どちらも同じ語で始まる」という点に着目したとしても、それが関連性をもたないことは明かである。個人言語において、a. と b. を有意義に考察するには、「レベル (2) b.」の条件取り入れざるを得ない。

問題は、明かに、「レベル (2) b.」の扱い方にあると言わねばならない。

## 5. <レジスター> 概念の効用

以上の様に考察をすすめてみると、<レジスター>の捉え方が一様でない理由が何処にあるかが、明らかになる。即ち、<レジスター>が1つの一般概念そのものでないとすれば、問題は前述のように、談話分析の観点からは、何をどのように「レベル(3)」にいうタイプ=パターンとして範疇化するかに帰するであろう。上掲の Ellis (1966) から引用した例文は、「レベル(1)」におけるパターン化が全面的には可能でない事を示している。従って、この種の発想は捨て去らねばならない。

つぎに「レベル(2) b.」の条件に関する範疇化は可能であろうか。既に、「初対面のヒト同士の挨拶」と「医師・看護婦と患者の会話の冒頭部」という事が考察されている。この事実は、既に条件を範疇化していることに他ならない。つまり、「レベル(3)」の範疇化の過程は、媒介となる条件・要因のタイプ化=パターン認識を意味するのである。これを「場面の特徴」の集合としてパターン化する試みの一つが、Halliday 流に FIELD, TENOR,

MODEとして典型化する理論であると受け止めることができる。

さらに「場面」のうち、「レベル(1)」の言語的表現と関連しない場面の特徴を区別して〈situational material settings〉とし、関連のある要因のみを「場面の脈絡」(context of situation)として範疇化する場合がある。<sup>(28)</sup>上掲のEllis(1966)の例 a.では、初対面のヒト同士を紹介する第三者の存在が問題になり得る。これを場面の脈絡のパターンの下位区分として考慮することは自然であろう。しかし、その場が空港ロビーであるか、鉄道の駅であるか、あるいはパーティであるか、というようなことは、言語的表現と関連のない場面の条件である。

このように、言語的表現との関連において「場面の脈絡」が範疇化できるとすれば、一方において、上掲の a. と b. のそれぞれの言語的表現が、互いに相補的であるという事実を認めなければならない。すなわち、一方の「場面の脈絡」においては、決して他方に関連する言語的表現が現れないという事である。既に、Hjelmslev(1961)から「異体(variety)」と「変体(variation)」という概念を借用した時に決まっていた事であるが、ここであらためて思い起こし、確認しておきたいと思う。

ある言語の話し手としてのヒトは、その個人言語の中に、「場面の脈絡」と関連する「異体」の知識を蓄えている。Ellis(1966)はこれを比喩的に「レパートリー」と呼ぶ。<sup>(29)</sup>レパートリーは場面の脈絡と関連する適切な言語的表現の集合である。ヒトは、場面の脈絡を条件として、レパートリーの中から、適切な要素を選び出して用いる。丁度、大工が道具箱から適当な道具を選び出すようにである。「異体」は、このように選択されて「レベル(1)」の中に姿を現す。つまり、発話行為の中で現実のものとして具現化する。具現化したものには、異質で関連性のないものも付着する可能性はあるが、その中核にあるのは、場面の脈絡と結び付いた「異体」としての〈テキスト〉である。

以上の考察の中で〈レジスター〉という概念は何を語ったであろうか。個人言語が〈テキスト〉として具現化する以前に、ヒトが知識として蓄

えている言語表現の「異体」の集合 — レパートリ — からの選択の過程があったと考えられた。この選択は、範疇化した場面の脈絡を条件とし、媒介として行われた。ここで用いた術語のそれぞれについては詳しく限定を加えたつもりであるが、本稿においてそれ以外に語ったことはないと考ええる。

そして、以上のように要約される現象のどこに〈レジスター〉の概念が位置づけられるべきなのであるかについては、この過程全体を〈レジスター〉と呼ぶか、範疇化した場面の脈絡を〈レジスター〉というか、あるいは、関連する言語表現の「異体」のレパートリーを〈レジスター〉と呼ぶかの可能性がある。それらのいずれの措置をとっても、現象の捉え方の理論的枠組みに影響を与えずにおかぬであろう。

かくて、〈レジスター〉を、〈方言〉とおなじように、むしろ「レベル(4)」に位置づけ、抽象的で内容の希薄な概念として受け入れる余地が残る。このレベルでの範疇は、理論上の虚構として、それ自体、何等かの実体性を伴うものではない。従って、〈レジスター〉という領野の項目を掲げるとしても、個人言語の多様性の現象を分析、説明するには、より具体的なレベルの下位の諸範疇のもとに考察をすすめる強い理由があると考ええる。

(1998.1.15.)

## 註

- (1) 一般には「言語使用域」というが、本稿では敢えて原語をカタカナ書きで用いる。「域」という語は“境界・区切りをもった一定の拡がり・範囲”の意味を含む。本稿で論じるように、〈レジスター〉をこのような概念で把握することに筆者は疑問を抱くものである。この訳語は、音楽用語としての「声区」(register)の影響を受けて案出されたものと想像される。
- (2) Halliday, et al. (1964), p.77.
- (3) *Ibid.*, p.87
- (4) 〈レジスター〉を“一個人の異なる言語活動”について始めて用いたのは、Reid, T.B.W. (1956): *Linguistics, Structuralism, and Philosophy*. Ar-

*chivum Linguisticum*. 8., pp.28-32. であるという(参照:大塚・中島(1982), p.1026.)。Stevens (1964) は脚注 (p.20.) で, 1963年5月16日, ロンドン大学教育学部 (the University of London Institute of Education) において, <レジスター> に関する口頭発表を行ったと述べ, M.A.K. Halliday, J. C. Catford, R. Quirk の見解に負うところ大であると謝辞を述べている。また, Enkvist (1964) では, 脚注 (p.30.) で, 1961年7月にケンブリッジ大学 ジーザス・コレッジで開催された外国語としての英語教育関係者の学会で, J.C. Catford が <レジスター> について定義を試みたことに言及している。

- (5) Langendoen (1968), p.6.
- (6) Biber (1994), p.51.
- (7) *Ibid.*, pp.51-53.
- (8) Yaeger-Dror (1996), pp.247f.
- (9) Heath & Langman (1994), p.100.
- (10) ここに <ジャンル> とか <スタイル> の概念を導入すれば, より明快な説明が可能であったと思われる。
- (11) Ventola (1995), p.4.
- (12) 同志社大学龍城正明教授のご教示による。
- (13) Stevens (1964), p.20.
- (14) *Ibid.*, p.27.
- (15) Ferguson (1983) quoted in Biber & Finegan (1994), p.51.
- (16) Hjelmslev (1961)は Francis J. Whitfield の英訳による。同時に, 日本語への訳語については, イエルムスエウ・林 (1959) を参照した。
- (17) Hjelmslev (1961), p.62.
- (18) *Ibid.*, p.82.
- (19) *Ibid.*, p.40.
- (20) “虚構” というのは, 「虚偽」を意味するものではなく, 「理論的複合概念 (theoretical construct)」の意味である。中島 (1972), p.168. 参照。
- (21) Brown & Yule (1983), p.62.
- (22) *Id.* なお, ボッパー・森 (1995), p.85. など参照。
- (23) Ellis (1966), p.83.
- (24) *Id.*
- (25) Stevens, *op. cit.*, p.27.
- (26) Lyons (1977), p.16.
- (27) Halliday (1961), p.270.

(28) Hasan (1995), p.219.

(29) Ellis, *op. cit.*

## 文 献

- Arnold, J., R. Blake, B. Davidson, S. Schwenter & J. olomon (1996), *Sociolinguistic Variation. Data, Theory, and Analysis. Selected Papers from NWA V 23 at Stanford*. CSLI Publications.
- Bazel, C.E., J.C. Catford, M.A.K. Halliday, R.H. Robins (1966), *In Memory of J.R. FIRTH*. Longmans.
- Biber, D. (1994), An Analytical Framework for Register Studies. Biber & Finegan (1994), pp.31-56.
- Biber, D. & E. Finegan (eds.) (1994), *Sociolinguistic Perspectives on Register*. Oxford University Press.
- Brown, G. & G. Yule (1993), *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.
- Ellis, J. (1966), On Contextual Meaning. Bazel et al. (eds.) (1966), pp.79-95. *ENGLISH STUDIES* (1964), Vol.XLV. No.1. February.
- Enkvist, N.E. (1964), On defining style. Spencer (ed.) (1964), pp.1-56.
- Ferguson, C.A. (1983), Sports Announcer Talk: Syntactic Aspects of Register Variation. *Language in Society*. 12: 153-72.
- Fries, P.H. & M.G. Gregory(eds.) (1995), *Discourse in Society: Systemic Functional Perspectives. Meaning and Choice in Language: Studies for Michael Halliday*. Ablex Publishing Corporation.
- Halliday, M.A.K. (1961), Categories of the Theory of Grammar. *WORD* (1961), pp.241-292.
- Halliday, M.A.K., A. McIntosh, P. Strevens (eds.) (1964), *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. Longmans.
- Hasan, R. (1995), The Conception of Context in Text. Fries & Gregory (eds.) (1995), pp.183-296.
- Heath, S.H. & J. Langman (1994), Shared Thinking and the Register of Coaching. Biber & Finegan (eds.) (1994), pp.82-105.
- Hjelmslev, Louis (1961), *Prolegomena to a Theory of Language* [Translated

- by Francis. J. Whitfield]. University of Wisconsin Press.  
イェルムスレウ・林栄一(訳述)(1959)『言語理論序説(英語学ライブラリー  
(41))』研究社  
Langendoen, D.T. (1968), *The London School of Linguistics: A Study of the  
Linguistic Theories of B. Malinowski and J.R. Firth*. MIT Press.  
Lyons, J. (1977), *Semantics I*. Cambridge University Press.  
中島文雄(1972)『意味論』研究社  
大塚高信・中島文雄(1982)『新英語学辞典』研究社  
ポッパー, K・森博(訳)(1995)『果てしなき探求 知的自伝 上』(同時代ラ  
イブラリー 248) 岩波書店  
Spencer, J. (ed.) (1964), *Linguistics and Style*. Oxford University Press.  
Stevens, P. (1964), Varieties of English. *ENGLISH STUDIES* (1964), pp.  
20-30.  
Ventola, E. (1995), Generic and Register Qualities of Texts and their Real-  
ization. Fries & Gregory (eds.) (1995), pp.3-28.  
Yaeger-Drol, M. (1996), Intonation and Register Variation: The Case of  
English Negative. Arnorld et al. (eds.) (1996), pp.243-259.  
*WORD* (1961), Vol.17, No.3. December.